

瀧澤馬琴の生涯

暉 峻 康 隆

この稿は、昭和十八年の頃、眞山青果氏の依頼によつて執筆したものである。昭和十年に「隨筆瀧澤馬琴」を上梓し、馬琴の性格を見事に浮彫りされた眞山氏は、その後江戸地理研究の一環としての馬琴の居住考、ならびに馬琴およびその父兄が用人として勤仕した大名・旗本の祿高・邸宅等の調査を續行し、ほぼ一段落ついたのであつたが、そのみでは發表の困難が豫想されたので、私が右の資料を生かしつつ、馬琴の生涯をまとめることになつたのである。幸ひに早稻田大學附屬圖書館には、馬琴關係の資料が豊富に架藏されてゐるのでこれを利用して、できるだけ詳細な傳記をおうまとめ上げることができた。眞山氏と連名で發表することになつてゐたが、なほ意に滿たぬ箇所が追々發見され、またこの稿の中に挿入すべき地圖の製作に手間どつてゐる中に、昭和十九年の春、私は兵隊に引つばられ、終戦後まで大陸に在り、復員後まもなく、昭和二十三年に眞山氏が病歿されたので、そのままになつて今日に及んだのである。もともと私は馬琴といふ作家をあまり好きでない上に、すすんで取組んだ仕事でもな

かつたので、すっかり忘れてしまつてゐた。ところがこの度馬琴の支那小説觀、すなはち馬琴の讀本作法を知るに重要な資料の一つである早稻田大學圖書館藏の未翻刻自筆稿本、「水滸後傳」を批評した「半閑窓談」一冊を翻刻することになつたので、ふと埋もれてゐたこの稿を思ひ出し、この機會に眞山青果氏の遺志を生かすことにした。このたび加筆訂正した部分もあるが、おぼむね當時の原稿のままである。

出生以前（松平家と瀧澤家の關係）

瀧澤家とその主家松平家との關係は、馬琴の曾祖父瀧澤運兵衛興也にはじまる。運兵衛は瀧澤家の第三世で、瀧澤大右衛門秋圓の男である。

はじめ武藏國入間郡河越城主伊豆守松平信綱（七萬石）の童小姓であつたが、信綱の四男松平頼母堅綱が、寛文元年の春領地一千石（武藏國埼玉郡志多見村妙願寺村下之村）を分けられ、江戸深川海邊橋の東の第に移住したので、之に従ひ寛文元年より同五

年堅綱の歿するまで家老（用人ならん）として仕へた。運兵衛興也はさらに二代松平文右衛門、三代松平内記信連、四代松平舍人に仕へ、奉仕年數凡そ五十六年、享保元年十月二十八日に歿したので、同年十二月馬琴の祖父にあたる瀧澤源内興吉（のち左仲）が家督をつぎ、父の職を襲うて家老となつた。興吉は養嗣子で、川口村の代官（郷土）眞中仁藏全直の二男である。なほ運兵衛興也は馬琴の菩提寺小石川茗荷谷深光寺に葬られたが、その主四代松平舍人も同寺に葬られた。源内興吉は奉仕二十餘年にして、元文中多病の故をもつて致仕隱居したので、そのとき近習として仕へてゐた興吉の長男大右衛門興義（のち運兵衛）、即ち馬琴の父が家督をつぎ、延享二年十月家督の五代松平鍋五郎信成に舊のごとく仕へたが、このとき父の代よりも俸給が減少された。元文中中家督を相續したときは十四五歳、延享二年に五代鍋五郎が松平家を相續したときは二十一歳で、父の用人職を襲うには若年にすぎ、近習として仕へたからである。時の家老は市川興市といひ、權を弄び媚をよるこぶ人で、ややもすれば累代の舊臣たる運兵衛興義を忌み、讒を構へて拒むことが多かつたので、運兵衛はつひに意を決し二親への孝養を弟大吉および林四郎に托して致仕した。時に寛延三年、運兵衛二十六歳の秋のことである。致仕の理由について馬琴は「吾佛の記」に、「わが身の榮利を樂ふに足らねど、父母既に老て俸祿孝養に普からず、今忠孝を兩ながら全ふしがたきをいかがはせん、君には不誼の咎にあふとも、大不忠にだに至らずば、親の爲にこを去て大家に仕へて、その餘祿をもて孝養に充んこそ、子たるものの甲斐はあれと只顧に思ひ決め」といつ

てゐるが、辯護的で情理を缺くところがある。

致仕した運兵衛は所縁を求めて小笠原佐渡守長恭（領地六萬石奥州棚倉城主）の家臣松澤文九郎の養子となり、松澤大右衛門と稱したが、やがて部屋住より大小姓馬廻り役となつた。――松澤の家は深川元町の下屋敷にあつた。――居ること數年、大右衛門は文九郎の養女お門と結婚し、寶曆九年十月三日、深川元町通りの主君の下屋敷において長男左馬太郎を儲けた。時に大右衛門三十五歳、お門二十二歳。そのころ舊主松平鍋五郎の家老市川興市は、その奸曲私欲があらはれて追放せられ、家に老臣なく、いよいよ治まらなくなつたので、一日、鍋五郎は運兵衛を招いてみづから非を悔み、歸參を慫慂するところがあつた。隱居後もなほ月俸を支給されてゐた老父も、同居をよろこんで歸參をすすめたので運兵衛もいよいよ決心し、養父文九郎および主君長恭にはかつて圓滿辭職し、寶曆十年の晩春のころ、舊主松平の第に還つた。時に妻お門も三歳の長男左馬太郎をたづさへて良人にしたがつたのである。爾來、大右衛門を改めて瀧澤運兵衛と舊姓に復し、用人となつて荒廢せる家政の整理につとめた。歸參の翌年、寶曆十一年には二男吉次郎が生れたが、翌十二年八月に歿し、又その翌年十三年冬には三男荒之助が生れたが、これも翌十四年（改元明和元年）の三月に歿した。つづいて翌明和二年に四男鈴木常三郎興春が生れた。後安永五年、十二歳にして親戚高田均平の養子となつた人である。

馬琴出生（幼年時代）

明和四年六月九日、馬琴は運兵衛興義の第五子として、深川海邊橋の東なる主家松平鍋五郎の屋敷内に生れた。時に父は四十三歳、母お門は三十歳。長男左馬太郎は九歳、四男常三郎は三歳であつた。幼名を倉藏といふ。ひきつづいて明和八年七月三日（一に十四日）には妹蘭（のち香と改む）が、父運兵衛の歿する前年の安永三年三月二日には妹菊が同所で生れた。當時馬琴は八歳。少年時代の馬琴は兩親・二兄・二弟のなかにあつて、幸福な日々を送つてゐたわけである。その時分の生活、あるひは住居の状態については、あまり傳ふところがないが、少年時代の記憶によつて書いた「吾佛の記」その他によつておぼろげながら窺ふことができる。

馬琴の父興義は相當の大酒家で、朝夕酒を嗜み、また客あればそれを敵手に盃をめぐらすといふ風で、けつきよくそのために命をおとしたのであるが、それだけにまた豁達で、武を好み、兵家の七書（孫子・吳子・司馬法・尉繚子・三略・六韜・唐太宗李衛公問對）をつねに座右に置き、刀劍を愛し、興にいれば酒席で竹刀をとつて擊劍を試みることもあつた。またさうした一面には可蝶と號し、百萬堂旨原などの判で俳諧を試みることもあつた。しかも用人だけに家政に長じてゐたとみえて、馬琴の言葉にしたがへば「子貢が術をや兼給ひけん、その祿は多からねども物に乏しき」ことなく、當時家に下女二人、庖刀を掌る彦四郎といふ下僕まで召使つてゐた。相當に子煩悩であつたことは、馬琴の「わが妹のこの年（安永三年）の春三月うまれしを、父のかき抱きつつ、主君の園池を逍遙し給ふ」といふ記述からも察せられるが、しかし

男子に對してはやはり武士的な教育法をとつてゐる。馬琴が六七歳のころ、つねに武士といふものはたとひ忍び難いことがあつても苦痛をあらはしてはならぬ、と教訓されたといふが、時に醉餘の餘興に三人の男子を試みることもあつた。娘を抱いて逍遙したといふ園池は、深川なる松平邸の東隅にある方一町ほどの池で、樹木や笹にかこまれ、その東南部に稻荷の祠があつた。運兵衛は深夜に少年らを一人づつその稻荷の祠にやり、繪馬でも幣帛でもなにか證しをとつて來させ、もしそのとき憶する氣色のあるものはひどく折檻し、憶せずとつて來たものは賞したといふ。この池は明治初年まで輪郭を残してゐたが、十年後の地圖によると材木貯藏池となつて段々擴張され、明治二十年頃の實測圖では、松平屋敷の大部分が池地になつてゐる。

當時の馬琴一家の居宅の状態についてはほとんど資するものがなく、ただ「吾佛の記」に、圃のほとりに桃の樹が自然と生えだたのを母が愛してゐたが、花の咲かないうちに父は世を去つたといふ追憶をみるのみである。なほ馬琴が深川一ノ鳥居邊の小柴長雄（三井親和の高弟）について書を學んだのも、七八歳のころであつたらう。

不遇時代（一家離散）

馬琴九歳の年、安永四年三月廿六日、父運兵衛は多年の大酒がたたつて中風になり、吐血して歿したので、當時十七歳の長男左馬太郎が家督を相續し、出仕して近習役となつたが、俸祿は半減せられ、生計は困難をきはめたので、召使はすべて暇をだし、廣

い居宅に母子六人が残つた。母門はこの年三十八歳、頭髻^{かぶ}を剪つて惠正と法名した。

翌安永五年の秋、年少の子女を抱へて生計に窮した母門は、妹婿の伊藤半平と相談の結果、時に十二歳の仲息子常三郎を伊藤半平の兄高田均平（旗本蒔田連三郎八七千石の御納戸役、邸は神田橋外小川町）に養子として遣はした。よつて高田清次郎と名乗る。同じ年の十月晦日、左馬太郎は主家の薄遇にたへかね、母に計つて浪人し、亡父の従父弟なる小石川御簗筋町の御普請役石川忠次郎（天明中本所割下水に移り、官太夫といふ方に寄食した。よつて當時十歳の倉藏（馬琴）は、主君鍋五郎の命によつて家を嗣ぎ、その孫八十五郎（六代松平兵庫頭信行の長男、長病のため家督に立たず）の小姓となつた。家督に際しては鼻紙料として金二兩二分に月俸二口を興へられた。それ故俸祿はいよいよ減じ、母子四人の口を糊するにたらず、かつ流浪中の長兄左馬太郎の衣食も母の手によつて賄はれてゐたので、貯へも盡きさて、その上馬琴の家督に際し、父の居宅も召上げられ、邸内の小長屋に逼塞する惨めさであつた。

翌安永六年の暮、左馬太郎は石川の家を去つて、松島町の戸田長三郎第中なる伯父（母の妹婿）伊藤半平の宅に寄食し、儲書筆耕をしてわづかに自給した。當時左馬太郎は瀧澤左太郎と稱した。伊藤半平の主戸田長三郎は、美濃大垣の城主戸田采女正の分家で、分知五千石の家である。

翌七年の秋、二十歳の兄左太郎は、當時百人組の頭であつた所領七千石の戸田大學忠諫に書をもつて仕へ、直次郎と改名し、濱

町稻荷堀なる同邸内に移り住んだので、母門は伊藤半平に相談して、病に托し主君（鍋五郎）に請うて蘭菊の二女を携へて直次郎の宿所に移つた。同年中のことである。時に馬琴は十二歳、ただ一人松平家に留まつて幼君に仕へたが、衣食に不便なので宿所を返上し、主君邸中の遠侍（俗に次といふ）に一人起臥した。その生活は、三年後の安永九年に松平家を去るまで續いたのである。まことに、馬琴の孤獨流離はこのときにはじまるといつてよい。

直次郎が仕へた戸田大學忠諫は、下總國佐倉の城主（七萬一千石）戸田忠昌より分れた家で、祖父忠章は忠昌の五男であるが父の遺領のうち三千二百石、外に新田三千八百石を分知して元祿十二年別に一家をおこしたのである。忠諫は寶曆六年四月家を繼ぎ、安永四年二月定火消となり、同五年五月百人組頭に轉じた。御府内變遷圖譜には、安永年中の形に、濱町入堀にそつて「戸田大學」とある。この屋敷は、延寶年間より享保圖まで土井大炊頭屋敷であるが、安永年中圖より戸田家になつて幕末におよんでゐる。なほ大正四年の圖に、蠣穀町二丁目二番地三番地四番地五番地を合はせたものが、その址であらう。

安永九年の冬十月、時に十四歳の馬琴は、深川の主家松平家を出奔した。出奔した理由について、馬琴は「從事艱難堪がたきの故に」とだけいつてゐるが、どんな風に辛かつたか、大よそ察しはつく。大身の旗本の長男といへば大がい我儘なものであるが、殊に馬琴が仕へてゐた幼君八十五郎は、體が弱くて家督にも立てなかつた人であるから、我儘な上に癪症であつたらう。しかも母や兄と別れて一人で起臥してゐた淋しさが、積り積つて出奔とい

ふことになつたのであらう。馬琴は前もつて知らせておいたとみへ、長兄直次郎は心配して逃げだして來た馬琴を途に迎へ、その後當分馬琴は濱町稻荷堀の戸田邸内の兄の家に母や妹らと一緒に暮すことになつた。

あくれば天明元年、以前から俳諧を嗜んで可樓と號してゐた長兄直次郎は、この年駿河の判者越谷吾山の門に入つて、東岡舎羅文と號した。俳諧の仲間はまだ、同じやうな身上の用人仲間であつた。同じく戸田家の給人松平藤左衛門（俳號自得）、近習豊田左内（烏川のも蘇山）、若年寄酒井飛騨守の御部屋番吉岡定八郎（文集また雪碇）、永井伊賀守の近習石倉文三郎（金馬のも山帶）、御屋従水野吉之丞の近習川島男也（姑山のち素鹿）等を羅文始終の友として、馬琴が「吾佛の記」にあげてゐるが、馬琴もまたもちろんその連中と交際したのであつて、馬琴が享和三年に出版した「俳諧歳時記」は、はじめ羅文の友人の一人吉岡定八郎こと雪碇が作つた素稿を羅文が増訂を試みたが、勤めがいそがしいので仕上げせずに亡くなつたのを、馬琴が完成したものなのである。兄の家に轉がりこんでから約一年目、元年の冬、馬琴をいつまでもさうしておくわけにもいかなないので、直次郎は主君の戸田大學に願つて一緒に使つてもらはうとした。ところが戸田家では徒士として召抱へるといふので、馬琴は喜ばず、兄に頼んでせめて中扨従として使つていただきたいと申入れたところが、戸田家では、右筆の子であればじめから中扨従として使ふが、弟は徒士として使ふのが當家の先例だといつて受つけないので、馬琴は奉公を止めようとした。しかし母や兄がしばしば教諭するので、やむな

く徒士として仕へることになつた。馬琴がなぜそんなに徒士といふ役を嫌がつたかといふと、いつたい徒士は兩刀を帯びる士分には違ひないけれども、主人の外出のときに草鞋ばきで袴の股立をとつて供をする、中間よりはいくらかましといふだけの卑しい職であつたからなのである。

さうして不承々々勤めたけれども、未だ若くてこらへ性がなく野心もあつた馬琴はとうとう辛棒しきれず、それから三年目の天明四年の暮三月、無断で戸田家を飛びだし、市中を放浪して行狀がおさまらないので、兄直次郎は咎められない先に祿を返上してしまつた。そのとき、馬琴は十八歳であつた。まだこの時分は文壇に關りはないのであるから、おそらく兄の友人の家や親類の家を泊り歩いてゐたのであらう。馬琴が飛び出すと、今度は同じ年の夏、親類の高田均平の養子となつてゐた仲兄の清次郎が離縁して、兄の家に轉りこんで來た。一難去つてまた一難、といふ有様で、母門や長兄直次郎の心配は並大抵でなかつたらう。さうかうしてゐるうちに、秋になると直次郎の主君戸田大學は甲府勤番支配となつて甲府に行くことになつた。そのころ母門はとかく健康がすぐれないので、直次郎は母を残して遠くへ行くことを心うく思つてゐたが、役儀も一段上つて近習（右筆を兼ね）にされたので心ならずも主人の供をして八月十九日に出發し、同月廿二日に甲府に到着した。同じころ、兄の家に同居してゐた仲兄清次郎は飯田町九段坂の御留守居高井土佐守に仕へ、同第中に移り住んだので、濱町の直次郎邸は母門と末娘の菊と二人きりになつてしまつた。姉娘の蘭は、春か夏か明らかでないが、とにかく同年中、戸

田大炊頭の奥方に仕へたので、兄の家に居なかつたのである。

清次郎が仕へた御留守居高井土佐守は、初め董直たけなほ、のち直熙ちき、通稱を市十郎、右近、五左衛門といひ、享保十八年に祖父飛騨守清房の遺跡（二千石）をつぎ、従五位下飛騨守に叙任した。

明和二年には御小姓組番頭にすすみ、同五年十一月御書院番、同七年三月御留守居になり、天明五年六月二十日に七十七でなくなつてゐる。九段坂の邸は、享和元年十月二十日の火事で焼けたので、小川町の水野監物邸と入代りになつた。

あくれば天明五年春、母門が病氣になつたので、戸田大炊頭の奥に仕へてゐた蘭も暇をもらつて看病することになり、仲兄清次郎もたびたび見舞つてゐたが、三月ごろになると病がますます重くなつてきたので、清次郎が甲府の長兄に知らせると、直次郎は二十日の日限を切つて暇をもらひ、急いで江戸に歸り、力をあはせて看病したが良くなる氣色がみえない。そこでふたび暇を願つたが許されず、重ねて出仕を催促されたので、直次郎も「藤はふたたび得るよしあらん、親はふたたび得べからず」（吾佛の記）と腹をすゑて看病を續けてゐるうちに、遂に主君大學の怒りにふれ、職祿をめし放されてしまつた。時に四月二十一日のことである。直次郎はかねて覺悟の上なので、病母を駕籠にのせ、妹二人とともに九段坂の高井邸なる弟清次郎の家に引移つた。馬琴はそのころ居處を定めず、あるときは市中に、あるときは近郷に放浪してゐたので、母の病を知らずに過ごしてゐたが、六月上旬、母の病は明日をも知れぬ有様なので、長兄直次郎は馬琴が市内に歸つて來たことを知つて、みづから馬琴を訪ねて母の病氣をつげ、

一緒に病床にかけつけたのであつた。それから兄弟が力をあはせて看病したが、病母はすでに死を覺つたと見えて、六月十六日、兄弟を呼びよせて教訓し、かねて貯へておいた金子二十兩の配分を長兄直次郎に一任し、同月二十七日の巳の刻に歿した。病は俗にいふ腸満で、享年四十八歳、二十八日に小石川の菩提寺深光寺へ葬つた。七七日の忌辰の果る頃まで、兄妹五人は清次郎の役宅で忌に服してゐたが、九月に入ると清次郎の主人高井土佐守がなくなつたので、そこは渡り用人の悲しさで、身の暇を出されたので、傳手をもとめて赤坂三宅坂の御留守居水谷信濃守に仕へ、その屋敷に移り住むことになつた。時に清次郎を改めて瀧澤初右衛門と稱した。長兄直次郎は、新參の清次郎方に兄弟が揃つて同居しては工合が悪からうと思つて、妹二人を連れて、阿部隠岐守に仕へてゐた叔父田原忠興をたより、本所林町なるその宿所に移つた。そのとき馬琴も浪人ではあり、事の相談相手にもならうといふので同行し、冬の初めまで兄弟四人が叔父の家で厄介になつた。しかしいつまでさうしても居られないので、十月中旬、直次郎は飯田町堀留の山口和泉守に仕へ、妹二人を連れてその屋敷内へ移つた。このとき直次郎を改めて瀧澤大右衛門と稱したが、三、四年後また大を臺に改めてゐる。馬琴もまた相前後して、仲兄清次郎の世話で水谷家へ中扨従として仕へることになり、兄弟同居して春を迎へた。

清次郎と馬琴が仕へた赤坂の水谷家は、曾祖父以來代々信濃守に任じてゐるが、兄弟の仕へたのは水谷信濃守勝富である。この人は通稱左膳、彌之助といひ、明和五年十一月従五位下但馬

守に叙任し、安永八年遺跡相續後信濃守となつた人である。安永七年五月、一橋家老、天明五年六月二十四日御留守居にすすみ、同八年十一月御旗奉行になり、寛政三年十二月五日に歿した。享年七十七。法名は日珠、下谷の善立寺に葬る。

長兄直次郎の仕へた山口家の當主は實名直良、はじめ勘兵衛、後に和泉守に任じ、當時新御番、領地は二千五百石であつた。寛政四年七月十八日、麻布并橋から發した火事で、山口邸も焼け、本宅のみは無事であつたが、表長屋は焼失し、瀧澤の家もその時焼けた。

兄の世話で水谷家に仕へた馬琴は、ここにも尻が落着かず、それから五ヶ月目の、明くる天明六年三月に、水谷家を出て、雫子橋通の扨從番頭小笠原上總介政久の家に仕へ、そこへ引移つた。小笠原家は「御府内變遷圖譜」の雫子橋通安永二年之形に小笠原上總と見えてゐる。雫子橋通は今の千代田區飯田町一丁目より同一ツ橋通に架つてゐた橋で、江戸城外廓諸門の一つである雫子橋門があり、また見附があつた。同じ年の六月、當時十六歳の姉娘蘭は、外叔母夫伊藤報故の同僚小川源右衛門の媒介で、宮内卿の家臣崎山伊摠治に嫁入つた。伊摠治は勘定衆崎山文右衛門の子で、當時父子同居して大川端の下屋敷に住んでゐた。この宮内卿の下屋敷といふのは、「新篇江戸志三股圖」に見えてゐる。同月二十七日は亡母の一周忌に當るので、兄弟等は長兄の家に集つて供養し睦みあつたが、それから一ヶ月後の八月四日、思ひがけず仲兄初右衛門の死にあつた。かねて疝癰の持病のあつた初右衛門は、七月の初めごろから陰囊が腫れて赤坂三宅坂の長屋に一人籠つてゐ

たのであつたが、八月の三日になると、初右衛門の同僚の林太郎助が、飯田町堀留の長兄大右衛門に、初右衛門の工合が悪いし、看病する人の手もないから、一度来て見てくれといふ便りがあつたが、折悪しく大右衛門は太城の宿直に當つた主君の供をするこゝとなつてゐたので、翌朝番が明けてから行くといふ返事をしてその夕方御城へ行かうとしてゐると、そこへまた林からの使ひで醫者の見立てによると傷寒といふことで覺束ないから、もし主用で來られなければ弟左五郎(馬琴)を寄こしてくれといつて來た。そこで大右衛門は登城の途中、雫子橋の小笠原第に立寄つて、馬琴にその趣きを告げたけれども、馬琴もまた生憎宿直にあたる主君の供をして、出立ちを待つてゐたところなので、翌朝の迎へを非番の同僚に頼んで、おそくとも今夜の亥の刻(十時)までには赤坂に行くといふことにして別れたが、その夜當てにしてゐた同僚に隙いることがあつて豫定通り事が運ばず、翌朝かけつけた時はすでに午前十時(巳の刻)であつた。それより一足先に大右衛門がかけつけると、氣配を聞きつけて林太郎助がかけ出して來て、初右衛門が昨夜のうちになくなつたことを告げた。馬琴がかけつけたのはそれからまもなくで、兄に招かれてはいつて見ると、獨り者の悲しさに、枕もとには食殘した白粥や薬土瓶が散らかつてをり、熱が高かつたとみえて、亡骸は紫立つてゐた。歎いてもをり、れないので、兄弟はそれぞれ葬送の手配をし、翌五日の未の刻、未だ新參のこととて見送る人もないなを、兄弟二人がつき添つて小石川の菩提寺深光寺へ送つていつた。初右衛門、時に二十二歳、釋諡して光覺慈正信士といふ。

翌天明七年秋のころ、崎山伊摠治に嫁してゐた妹蘭が離縁して長兄大右衛門の家に歸つて來た。これは伊摠治の人柄が大右衛門の氣に入らず、前からごたごたしてゐたのが、遂に口説を引きおこして取りもどしたのであつた。しかし間もなく、同年十二月に蘭は名を香と改めて鈴木嘉傳治に再嫁した。嘉傳次の祖父鈴木三太夫入道牛後の妻も、せは、馬琴等の母の姉で、その縁で嫁いつたのである。牛後は木挽町柳生家の供頭であるが、嘉傳次も又後に留守居用人に進んで、祖父の俗稱を繼ぎ鈴木三太夫といつた。

同じ冬、馬琴は雉子橋の小笠原家を辭して櫻田の有馬家に仕へた。その時のことを「俳諧古文庫」の亭々亭記に、「ことし霜月、亭を梵城ちかき東のこなたにうつす、畑を隔て櫻川あり、うしろに霞ヶ關高く見あげて、市中に稀なる名所をあらはす」といつてゐる。ところが馬琴はよくよく勤め運がないと見えて、この有馬家にも約一年ほど勤めてゐるうちに、翌天明八年の冬大病にかかつて勤めを辭し、長兄大右衛門の家に歸つて治療することとなつた。「耳袋」には、この時の病氣をひどい瘡毒であつたといつてゐる。そのころ大右衛門は、母の死や妹の嫁入など物入り續きで手許が不如意だつたので、所藏の道具類を賣り拂つて看護につとめた甲斐があつて、翌寛政元年の正月になつて漸く馬琴の病氣も全快した。

思はぬ大病と、またその爲に兄に迷惑をかけたからであらうが病氣がなほると、その翌二月に馬琴は醫道を志して山本宗洪の門に入り、名も宗仙と醫者らしく改めた。山本宗洪は御殿醫で、いはゆる寄合醫師、養生所に勤役し、邸は小川町裏神保町にあつた。

馬琴等の叔父（父の弟忠興）田原四郎右衛門が、安永八年の頃から宗洪の門人となつてゐたので、その縁故によるのであつた。もとも勤勉な人柄であつた臺右衛門は、この年近習格の右筆から目附役となり、俸祿も加増され、めでたいことは重なると思へて翌寛政二年には、當時十七歳の妹菊も同じ山口家の給人田口久吾に嫁入つた。

ところが一方宗洪門に入つた馬琴の方は、自分でもその著書「兩談」に「余業を醫門に受しより縦横奔走さらに閑を得ず」といつてゐるやうに、入門早々のことで見習ひの藥箱持なみに追ひつかはれたとみえて、徒士の役儀さへ嫌つて飛び出したほどであるから、これも辛抱出來ず、一年半ほどでまた飛び出してしまつた。しかしこのときの馬琴は、父や兄の感化でいつかしらず親しんでゐた文學で身を立てようと、よくよく腹をすゑてかかつたとみえて寛政三年の秋、酒一樽を手土産にして、そのころ洒落本や黄表紙で一流作家として活躍してゐた、山東京傳を銀座一丁目に訪ねて師事することになり、深川仲町の裏長屋に假の住ひを定めた。二十四歳のことである。あたかもその年の冬、住ひに程近い深川永代寺辨財の開帳で壬生狂言が大當りをとつたので、それから思ひついて「廿四日餘盡用而二分狂言」といふ題の黄表紙を書き、歌川豊國の繪で、京傳門人大樂山人といふ匿名を用ひ翌三年の春出版した。これが、馬琴の作家としての第一歩となつたのである。

とにかく寛政三年の春には作家として第一歩をふみだしたわけであるが、黄表紙の一作ぐらゐでは生活のできるはずはなく、春のころには俄仕立の賣卜者になつて神奈川に逗留するといふ體た

らくであつた。しかもその留守中の三月、師事したばかりの京傳は、その作品「仕懸文庫」「錦之裏」「娼妓絹籠」の三作が、前年の十月二十七日に出た出版取締令に引かかつて手錠五十日の刑に處せられた。神奈川から歸つて來た馬琴は、京傳が翌年出版する漱定の黄表紙の手傳ひなどして暮してゐたが、八月に入ると深川邊は洪水があつて、馬琴の住ひも水びたしになつたので、暫く京傳の家に厄介になることになつた。一方長兄臺右衛門の方は、日頃の精勤が認められて用人に取立てられ、俸祿も加増されて譜代の重臣西田仙右衛門の次席につくほどの身上になつた。その年の冬には、主人の山口勘兵衛が大坂城代交替引渡しの使者として下阪することになつたので、臺右衛門も隨つて十二月二十七日に江戸を出發し、歸途伊勢神宮などに參詣して翌年の正月二十七日に歸つてきた。

そのころ、すなはち前年の冬のころから、馬琴は通稱佐五郎を佐吉に改め、京傳の家を出て、程近い日本橋通油町の版元葛屋重三郎方の庸人となつて住込んでゐた。京傳の弟京山の書いた「蜘蛛の糸巻」のなかに「つたやに三年ばかり奉公して」とあるから寛政三年の冬から寛政五年の秋、飯田町中坂の伊勢屋に入夫するまでの足かけ三年、葛屋に奉公してゐたことが知られる。かつて徒士を嫌つて飛び出したほどに名譽心の強い馬琴が、本屋の番頭になつたのは、葛屋は師匠にあたる京傳の版元ではあり、また葛屋はただの本屋といふわけではなく、葛の唐丸といふ狂歌師として知られてゐた男でもあり、かたがた作者として立つにはなにかと都合がよがつなからであらうと思はれる。葛屋の方でも、その

年京傳の洒落本を出した罪に問はれ、身上半減の處罰を受けた際であつたから、新しい作者を養成するつもりで、京傳方に轉つて作の手傳ひなどしてゐる馬琴に目をつけたのであらう。その證據には翌寛政五年の春、はじめて曲亭馬琴といふ號を使つて「花園子食家物語」「鼠子婚禮慶劫記」「荒山水天狗鼻祖」「御茶漬十二因縁」といふ四部の黄表紙を發表してゐる。ただの番頭として庸はれたのでないことは確かである。話は元にもどつて、寛政四年の秋七月二十一日、麻布の國府方橋の邊から失火して、延焼數十町に及んだので、飯田町堀留の山口家にも火がかつた。このとき馬琴は友達を一人つれて兄の宿所にかけて、道具類のもちだしを手傳つたが、宿所は遂に焼けてしまつた。しかし焼けたの表長屋だけは、山口家の居所は火をのがれた。

翌寛政五年、長兄臺右衛門は三十五歳の夏六月十六日、外叔母夫伊藤半平（報故）の媒妁で、戸田内膳の用人山田平兵衛高忠の妹添をめとつた。添は平兵衛の異母妹で、高家織田大膳の奥方に仕へてゐたもので、時に十九歳であつた。そのころ主君山口勘兵衛も小普請支配に轉ぜられ、官務はいよいよ慌しくなつたので、その冬十二月加増され給金一年十五兩、三人扶持、ほかに鹽、味噌、薪まで添へられた。同じ年の秋七月下旬、馬琴は世話するものがあつて、九段中坂下の履物商伊勢屋に入夫したので、兄の宿所とも近くなり、それから後は毎日のやうに往來して、俳諧などをもてあそんで睦みあふやうになつた。馬琴が入夫した履物商伊勢屋の主人會田氏は寡婦で、名を百といひ、當時馬琴より三歳年長の三十歳であつた。もと下谷の伊豫大洲侯加藤遠江守の母堂に

奥勤めしてゐたが、相續人である上に、父親は早くなくなつて老母一人なので、暇をもらつて家に歸り、夫を迎へて家をついだのであつたが、まもなく未亡人になつてしまつた。さうしてゐるところへ、縁あつて葛屋で働らいてゐた馬琴が入夫したのである。

馬琴はその商賣を「職おほきなかにも人の土足にかける品」と恥ぢてゐたほどであるから、好んで入夫したのではなかつたらうが下駄屋とはいへ當地の家主であり、父親もなく係累も少い上に、とにかく奥勤めをしたこともある女であつてみれば、葛屋の庸人でをるよりは、はるかによい條件であり、また志した戯作の道も今年の春に堂々と署名して出した四部の黄表紙も満更悪い評判でもなく、これならやつていけるといふ見込みも立つて、獨立したい矢先であつたからであらう。しかし商賣を卑下した氣持に變りけなかつたので、入夫した當時こそ伊勢屋清右衛門と名跡を繼いだが、寛政七年に老母がなくなると、商賣をやめ、また姓も本姓瀧澤に返つてゐる。さて、中坂下の伊勢屋の位置はといふと、東京市發行の「東京の史蹟」麹町區の部に「曲亭馬琴宅趾の井戸」〔假指定、飯田町二丁目二十三番地〕文豪馬琴の宅趾でまた終焉の地である。馬琴居住の家屋も明治七年まで存したが、其年の大火に焼失した。併し當時の井戸のみは今に存して居、尙同處には馬琴五代の孫瀧澤邦行が居住してゐる」とある。この地を馬琴終焉の地とするのは誤りであるが、その居住地であつたことは確である。戯作者考補遺には「元飯田町中坂下南側中程」とある。この店は後に馬琴が商賣をやめて裏屋に引込んでからは、八百屋に貸家してゐるが、馬琴日記によると、「九月分八百屋上やちん南鎌三片持

來ル」六月八百屋宿賃三片」などあるから、上家賃が月一分二朱であつたことが知られる。

飯田町時代

寛政五年の秋七月下旬、九段中坂下の伊勢屋に入夫してから、文政五年五月、神田明神下の伴宗白の家に同居するまでの三十二年間を、馬琴は飯田町に暮した。馬琴の讀本作家としての基礎が固つた、いはば全盛時代である。伊勢屋に入夫した翌々年の寛政七年に、讀本の處女作「高屋船字文」を發售したのを手初めにしだいにその創作力を増し、「椿説弓張月」（初篇・享和三年刊）、「南總里見八犬傳」（第一輯・文化十一年刊）、「朝夷巡島記」（初輯・同年刊）等、馬琴の生涯をかけた大作が起稿されたのもこの飯田町の家においてであつた。ここにこの時代の身邊動靜のあらましを述べることにしたい。

伊勢屋に入夫した翌寛政六年、馬琴は早くも長女さき（一説でつ）を儲けたが、同年の正月、兄の家ではじめての子供が流産した。臺右衛門の家では引續いて翌七年の八月にも女子が誕生し清と名づけたが、これも九年の正月痘瘡を患つてなくなつてゐる。馬琴の家では七年の四月に一人の老母がなくなつたので、やつと天下晴れて本姓の瀧澤氏に還り、商賣も止めて手習師匠をはじめ創作に精進するやうになつた。また神女湯や奇應丸、熊膽などの寶藥をはじめたのもこのころであり、翌八年には二女ゆふが生れた。寛政九年、兄臺右衛門の娘がなくなつた同じ臺三月廿六日は馬琴等の父の二十三回忌にあたり、また同年六月廿日は母の十三

回忌に當るので、兄弟はかつて父の年忌に同時に行ふこととし、深光寺の墓石を修復し、二十五日の連夜には法筵を開いて近親追薦の發句を集めたりなどしてゐる。同じ年の十一月二十四日、臺右衛門は女子葛を儲け、それまでの男女がみな早生したので、子守まで庸ひこんで大切にしていると、一月遅れて十二月の二十七日に、馬琴も長男鎮五郎を得た。時に馬琴は三十一歳のことである。なほ馬琴が飯田町に来るまで足掛三年身を寄せた耕書堂の主人萬屋重三郎がなくなつたのも、同年五月六日のことである。馬琴は長男を、兄は長女を得てしばらく仕合せがつづくかと思えたが、翌年の秋七月十八日に兄臺右衛門は發病し、病臥二十三日にして八月十二日四十歳でなくなつた。時に一女葛はまだ生後十ヶ月、未亡人添は二十四歳だつたので、葛を守り育てて、兄の跡をつがせようと思つた馬琴は、添と相談して葛をわが家に引取り、乳母を庸つて育てることにし、添は母生田の主人高家織田大膳の第に歸參して、その奥方に仕へることになつた。しかしまだ養子のことも整はないうちに臺右衛門の宿所を空にしておけないので添が歸參した十月二日の日から、馬琴は妻百と子供三人、葛とその乳母を亡兄の宿所にやつて守らせることにしたが、十一月初旬山口家から女子はまだ幼少虚弱で成長も覺東ないから、壯年の者を名迹に立てよといひだされたので、馬琴も空屋を守つてゐても益ないことと思つて、十一月の七日に宿所を役人に明渡しして引上げた。さて馬琴は、妹秀の夫鈴木三太夫の二男房五郎(時に六歳)を乞うて、臺右衛門の名迹とし、葛女はあまり虚弱なので、母添の所望にまかせて引渡したが、寛政十一年の秋八月、三歳を一期

になくなつてしまつた。一方房五郎の父三太夫も不義があらはれて、大和の柳生の莊へ幽せられ、享和三年に歿したので、前約も解消し、その結果長男の鎮五郎與繼が、文政元年秋、臺右衛門の名迹を繼いだのである。さうしてゐる間にも、寛政十二年には三女くはが生れ、秋には豆相漫遊をするほどの平安が訪れた。九月十日江戸を出發、武州金澤を経て、浦賀から下田へ、更に天城を越えて修善寺に旅寢し、鎌倉を経て一月ばかりで歸つた。馬琴としては初めての大旅行であつたわけであるが、創作上も得るところが多く興に乗じたのであらう。更に翌々年の享和二年には、三月餘の京阪旅行を企てた。五月九日に江戸を出發し、東海道の名所古跡を遊覽しつつ、名古屋を経て京阪に入つた。このとき名古屋の宿屋で、ある人の藏してゐた水滸後傳を一見し、珍らしく回目のみを抄録して大阪におもむいた。そこで知合ひになつた長崎の醫生馬田昌調から、水滸後傳に二種類あるといふことを聞き、京阪の書肆をくまなく探したが見當らず、そのままになつてしまつたが、この事が三十年後の天保二年に、水滸後傳評の「半閑窓談」を書く原因となつたことは留意してよい。なほ大阪では西鶴の墓などに詣で、さらに伊勢を経て江戸に歸つたのが八月二十四日、日數百有五日の大旅行であつた。その旅中の見聞を歸る早々筆を執り、十一月初日に校合を終つたのが「羈旅漫録」三卷である。この旅行を契機として馬琴の文名も京阪地方にまで知られ、漸く訪問する者が多きを加へたので、元來人づきの悪い馬琴は應接をいひ、と義笠漁隱と號して閑居することが多くなつた。飯田町の十五間間口の家主給金(一ヶ年二十兩)を副収入として、す

ぐ地つづきの裏屋を改築して移つたのは彼が三十六歳のとき、享和二年の上方旅行前後のことであつた。文政二年彌生二十四日、仙臺の只野眞菴に興へた手紙のなかに、その住所を「元飯田町中坂下南側、石灰屋と八百屋のあはひにて、引入れたる路次のうちなる正面、出かうしあり、瀧澤清右衛門」と案内してゐる。また文政元年十月、鈴木牧之への書中、その裏屋の様子を左のごとく傳へてゐる。「只今住居いたし候本宅十六ヶ年已然(享和二年に當る)に立かへ候處、二階には四十箱餘の藏書を積おき、下屋にも是迄特別宅の心がまひに、追々諸道具をたくはへ、十坪にたらぬ建家の内、いやが上に物多くつみおき候故か、土臺めり込柱かたぶき、障子の立つけ合不レ申、その上一軒はなれ家故、大風の節はゆりうごき、そのままにはさしおきがたく候に付、根つぎ可レ致と存じ、兩三年前大工よりつもりをり候處、廿八兩餘かゝり候よしにつき、だん／＼見合せ、今年迄傾き候まゝ住なし候へども云々」とある。更にまた、その二階の書齋の有様については、おなじく文政元年七月、牧之への書中に、「手前住居中手狭に付、拙者は年中二階住ひにて南をうけ申候、風は入り候へ共、膝元まで目さし入れ、夕方は又西日すぢかへに窓よりうしろの方をてらし候、夜は瓦のいきれ曉方までさめ不レ申候」といつてゐる。

京阪地方旅行の翌享和三年に發表した讀本「月水奇縁」は、半紙本讀本の最初のものであるが、これが時好に適つて、大阪と江戸とで千百部を賣り、勢ひに乗じて翌文化元年には「稚枝鳩」と「石言遺響」を、二年には傑作「椿説弓張月」をはじめ「四天王則盜異録」「三國一夜物語」等を續々發表して、漸く讀本界において

山東京傳と肩を並べるやうになつた。さうした馬琴の進出ぶりを見、またその狷介な人物に接するにつけ、寛政二年の洒落本禁止以來落目になつてゐた京傳は、かつてその浪人時代に世話をしたこともあるだけに、快くは思つてゐなかつたらしい。果然、文化六年冬刊の讀本「夢想兵衛胡蝶物語」をきつかけとして、京傳の馬琴に對する感情が表面化するにいたつた。それは「胡蝶物語」前篇卷三「色慾圖」において、馬琴が「忠臣蔵」を批評し、夫親のためとはいへ身賣したお輕の所業を、色慾に出了簡違ひと非難したのを、それより先、先妻なる新吉原扇屋の新造菊園のお菊を失ひ、寛政十二年にふたたび新吉原玉屋の玉の井こと百合を後妻にした京傳が、我が身の上を誹謗するものと受取り、翌文化七年正月、京傳は弟の京山と共に馬琴を訪れて詰つた。馬琴はその時「乞ふ先生かの物語をとりて漫然看過せず、智識を注いで須く熟讀せよ。先生の憤とけて不肖が世を喚起する眞意ある所を知らん」(伊波傳毛記)と他意なき旨を告げ、また京山も傍から取なしたので、その場は無事に收つたが、これより二人の交際はよそよそしくなつた。文政元年七月、牧之宛の書中に「わかし時京傳子と風流の文筆を以別戀にいたし候處、中年に及おの／＼志のあはぬ事あり、その上同家業にて、内心に忌れ候事も有之候故、十年來はいつとなく疎遠にうち過、年始の外往來まれになり候き」といつてゐるが、實際はそれ程ではなく、京傳も隨筆「骨董集」を編むについては、しばしば馬琴と文通してゐる。しかし馬琴が京傳の下風に立つを潔しとせず、またその人生觀も、彼の武家的な節義觀と京傳の市民的な節義觀とでは一致するはずがなく、その

こと以來、従前の別戀を失つたことは確かである。京傳の歿後、馬琴が餘り好意的でない見方で、京傳の履歷を「伊波傳毛記」一巻にまとめたのに對し、京山が隨筆「蜘蛛の糸巻」において、それとなく馬琴の青年時代のことなど書いて酬めたことは、人のよく知るところである。

京傳といざこざのあつたその年文化七年、十七歳になつた長女さきを柳河藩立花家（十一萬九千餘石）の奥奉公に出した馬琴はすでにさきも年頃のことではあり、また自分も隠居し自適したい希望もあつたので、三年辛棒を見届けた上で妻あはすといふ約束で、文化八年三月養子を迎へた。養子は貸本屋渡世を望んだので二十七兩の元手を入れ、馬琴懇意の武家方へ渡りをつけて、忽ち百七八十軒の得意が出来たが、養子が制禁の春畫本類を扱ふやうになつたので、馬琴がきびしく教訓すると、腹を立てて即日家を出てしまつた。同じ年の八月のことである。しかし、貸本の方は得意も多く出来た上なので、急に止めることも出来ず、下男を二人抱へて貸出し、元帳貸帳は馬琴自身帳づけしてゐたが、何分人まかせのことなので、下男の一人が引負して、その年の大晦日に出奔してしまつた。困つてゐると、翌る文化九年の正月下旬、世話するものがあつたので、前と同じ條件でふたたび養子を迎へたが、これが大酒のみの放蕩者で、得意廻りはせずに新宿通ひに浮身をやつしてゐるので、馬琴も始終も見届けがたく思ひ、早くも同年五月離縁してしまつた。さうかうしてゐるうちに、次女のゆふも二十歳になつたので、文化十二年、麴町御門外の麴町十三丁目、せり呉服商人田邊久右衛門（後の孝の記）へかたづけた。なほ

三女くわが、宇都宮戸田家の醫師渥美覺重（小傳馬町油丁横山丁住居）に嫁したのも、このところのことである。

これより先馬琴は、長兄臺右衛門の歿後、その遺兒萬女の早生、またその名迹を繼ぐはすになつてゐた鈴木房五郎が棄權して以來長男鎮五郎を瀧澤の當主に擬し、「醫は學術と時運とによりて、官醫にもなるべく待醫にもなりのぼるものあり」と、文化七年十四歳の春より自分がかつて入門した侍醫山本宗洪にあづけ、後また鈴木良知に本經傷寒論を、小坂元祐に經絡鍼術を學べせたが、文化十一年、師山本宗洪の命によつて鎮五郎は剃髮し、宗伯と稱した。やがて文政元年、琴嶺こと宗伯二十一歳、その技術は既に上達したので、馬琴は兼ての希望通り、秋、長兄臺右衛門の後として第八世瀧澤氏となし、同時に神田明神下に新宅を購ひ、醫業を開かした。明神下宗伯宅の地主は、西丸御書院番橋本喜八郎で昌貞といふ醫者が文政十二年七月に五十坪借地して家作したが、まだ造作に及ばず、玄關に數石もなくあら壁のままであつたものを購つて、馬琴が新に修繕を加へたものであつた。ただし、文政九年の正月より地主は御勘定御普請役杉浦清太郎に替つてゐる。八月二日に取引の相談がととのひ、手附金を渡し、八月二十日に引取つて翌二十一日に引移つた。このとき宗伯は母と季妹くはを伴つて移り、馬琴は長女とともに飯田町の舊宅に残つたのである。しかし前のやうな事情で造作が調つてゐないので、九月二日より大工を入れて造作にかかり、十月十五日に至つて、親戚を招いて新宅開きをした。馬琴は收之への書中、買とり候建家代金廿兩二分）その他の造作振舞費用、合せて五十兩に近い物入りであつた

といつてゐる。おなじころ、鈴木牧之への手紙に「昌平橋外、神田明神女坂下、同朋町東新道、西丸御書院番橋本喜八郎殿地内、琴嶺瀧澤宗伯、地坪四十坪ほど借用、建家は十六坪ほど有之、本宅（飯田町）よりはよほど手廣に御座候、無益の事ながら序に書きつけ申候、手前門通用ゆゑ、見附は相應に御座候」と通信してゐる。長男を獨立させた馬琴の喜びがあふれてゐる。その位置は「列傳小史」に「本郷臺の巽、神田明神の麓、同朋町に地を限る事八十坪、俗に鼠屋横町といひたりしとぞ。今の末廣町なり。明神社の女坂を下り、左へ二三丁、今諸岡何某といふ醫師のすめる角より折まけて縦横九間が昔の名残なりと、翁の孫の飯田町なる瀧澤つぎ女の物語なり。」とある。鼠屋横町といふのは、御府内備考、外神田平永町代地の書上に、「町内里俗表通往還御成街道と相唱、横町を鼠屋横町と相唱申候。右は藤七と申候もの同所入口え干店に而鼠商ひ仕候に付、近來々様申習候」とあるもので、明治圖でいへば、同朋町の通りから金澤町と末廣町の境を東に入る横町（現在芳林小學校の北横町）がその鼠屋横町なのである。瀧澤つぎ女のいふ諸岡といふ醫師は、文久二年改正の尾張屋切繪圖の鼠屋横町北角に、「師岡貞信」とある人と思はれるが、嘉永三年の近吾堂切繪圖には同所に「狩ノ」と記し、同六年三月の玉香園切繪圖では「狩野洞庭」とあるから、瀧澤家の舊居は一時狩野といふ畫家の住居となり、それから師岡醫師の居宅となつたものであらう。師岡氏はその後も長く同所に住み、明治十一年圖、同十八年圖、三十二年神田地所圖にもその名が見え、更に明治三十三年二月の東京名所圖繪の神田區末廣町の部には、「師岡診療所。十

九番地にあつて此邊尤とも古き醫院なり。常に外來患者の出入絶ゆる間もなし。」とあるばかりか、大正元年發行の地籍地圖では「神田區末廣町十九番地、七拾六坪三四。師岡宗春。」とある。

文政元年の秋、長男宗伯と別居した後、馬琴は前年の暮奉公先の立花家から歸つて來た長女さきとただ二人暮すことになつた。そのころ一人使つてゐた下女も七月にいとまを出した切りで、八年も奥女中をしてゐたさきが煮焼をすることになつたのであるが流石に味噌こし提げての買物も出來かね、夜分ひそかに調へるといふ風であつた。「障子は破れてもやぶれ候まゝにて、張かへ候ものもなければ、夜寒もひとしはなり、猫のひたひ程なる莎庭の草木等に霜よけする事もなければ、落葉を拂ふ事さへ稀也。」と、その不自由な佻しい生活を、鈴木牧之への書中に傳へてゐる。

あたかもその頃、文政二年、馬琴五十三歳の二月の末、仙臺侯の醫師工藤氏の女で、同藩只野氏の未亡人あやこと眞葛の姥の代理として、その妹の瑞祥院萩の尼が、自作の文章の添削紹介を依頼する文を携へて飯田町に馬琴を訪れた（瀧澤家訪問往來人名簿）。それをきつかけにはじまつた二人の文通による交情は、馬琴の生涯における一景ともなつたのであるが、まもなく文政七年、眞葛の死によつて終つた。同居してゐた長女さきも三十の聲をきくし、また二人切りの佻しい生活が馬琴の心をかり立てたのであらう。文政六年六月、前から心掛けてゐた養子を世話するもののあるままに、長谷河町の呉服屋依屋の手代吉田新六を、さきの婿として迎へた。これは恐らく次女ゆふの嫁ぎ先なるせり呉服商の縁によるのであらう。二人まで養子に手を焼いた馬琴が、三度目の

養子を迎へるについての條件を鈴木牧之宛の書翰中に左のごとく述べてゐるのも馬琴らしい。

此度は明わしたし同様にいたし、地主の目見并に順役被三申付候はゞ、拙者は直ちに退隱いたし候て、身上之事に構ひ不レ申候つもりにいたし、或は一と職分或は一と商賣もち候もの、廿六七歳より三十三歳迄の養子をたつね候、尤兩親同居不レ致候に付振舞金十五兩持參すべし、并に兩親養ひ小遣とし、家守給廿兩の内一ヶ年に五兩づゝ合米すべし、然る上は直に長女を妻合せ身上を引わたすべし云々

馬琴の條件通りの養子であつたか否かわからないが、とにかく三度目の正直で、此度の養子は氣に入つたと見え、翌七年には飯田町の家株を譲り、二代の清右衛門興利を名乗らせた。これより先、神田なる宗伯の東隣に、同じころ家を買求めて移つて來た研師某が居たが、酒客博徒の類で、傍若無人の振舞ひが多かつたので、宗伯も遂に絶交した。地主の橋本氏もいとはしく思ひ、地たてをよくして立去らせるから、そのあとの借地を引受けてくれといふことであつたが、馬琴が關帝議を採つて占つてみると、凶の卦が出たので、辭退してそのままになつてゐた。ところが文政六年の春になつて、その研師が借財のために家を賣つて他へ赴くといふことになつたので、機會逸すべからずと家を買はうとしたけれども、宗伯が絶交してゐるので、ひそかに書買山崎平八に頼んで之を買取つた。しかもその年の三月には、長女の養子も極つたので、いよいよ宗伯の東隣のその家に隱居することにきめ、三月下旬から修理をはじめた。庭に池を掘つて金魚鯉などを放つたり、

植木を入れたりして、十一月下旬に漸く落成した。宗伯の宅地と今新たに東隣の地を合して、借地は凡そ八十坪になつた。なほこの時掘つた池は、文政十一年冬十一月、すなはち嫡孫太郎を得た年後に、小兒に害あらんことを怖れて埋めてしまつた。かくして翌文政七年三月、養子に飯田町の家を渡し、四月、清朝の名戯曲家李笠翁に因み、號を笠翁と改め、五月九日には世事を遠ざかるの心で剃髪し、同月、小雨降るなかを神田の新宅に移り住んだ。飯田町の會田氏に入夫してより三十二年目、父子別居以來七年目に、又再び同居することになつた。時に馬琴五十八歳のことである。

神田時代

文政七年より天保七年十月に四谷信濃坂に轉居するまで、すなはち馬琴五十八歳より七十歳までの十三年間を神田時代とする。人間としても作家としても晩年期で、この期間に讀本は「八大傳」「巡島記」を續稿する一方、「近世説美少年錄」(第一輯、文政十一年刊)、「開卷驚奇俠客傳」(初集、天保三年刊)の大作を新しく起稿し、その他「傾城水滸傳」(初篇、文政八年刊)、「風俗金魚傳」(初篇、文政十二年刊)、「漢楚賽擬選軍談」(初篇、同年刊)、「新編金瓶梅」(初篇、天保二年刊)等の長篇草雙紙を發表してゐる。馬琴と屋代弘賢との交際はいつごろ初まつたものか明らかでないが、馬琴が神田に移ると、同じ神明下に弘賢が住んでゐたので、二人の往來は急に繁くなつた。年齡的にも、文政七年當時馬琴は五十八歳、弘賢は六十七歳であり、好むところまた同じく、共に

藏書家のことではあり、至極うまが合つたらしい。さうしてその秋八月には、弘賢とともに耽奇會の社友となつた。耽奇會とは、馬琴がまだ神田に移らない以前の同年春、松羅館主人こと西原好和（立花家の留守居）やその女婿海棠庵こと關思亮、および南無佛庵こと中村景蓮等が謀つて、社友五六名をつのり、各々所藏の古書古畫古器材を携へて來會し、考證評論する會合であつた。同じ年の秋、松羅館が馬琴を訪ねて誘ひ、馬琴も八月の集會から出席することになった。集會は文政七年春より翌八年冬十一月まで凡そ二十回にして終つた。そのうち、文政七年八月より翌年十一月までの集會の記録を、馬琴が天保三年にまとめあげたものが、「耽奇漫錄」五卷である。他に好問堂山崎美成の手になる第一回集會からの記録二十卷がある。耽奇會は立花家の用人西原一輔や千二百石を食む桑山修理（龍珠館）など、珍器名什を藏する好事家の集りであつたが、そのなかで特に文を愛する人々、すなはち馬琴や山崎美成や屋代弘賢等が計つて、毎月一回奇事異聞を綴り持寄つて被講する會を作つた。兎園會と稱し、文政八年正月、海棠庵關思亮方の發會にはじまり、同年十二月、著作堂の集會に終る。その毎回の記事を一部十二卷に輯めたものが「兎園小説」である。兎園會の會員は、耽奇會會員と重複する人もあるが、次の如くである。著作堂（馬琴）、好問堂（山崎美成、この年十月、海棠庵の例會に馬琴と論争し絶交す）、海棠庵（關思亮、書家關其寧の孫）、輪池堂（屋代弘賢）、松羅館（西原好和、立花侯の留守居）、麻布學究（大郷良則、林祭酒の門人）、龍珠館（桑山修理、旗本祿千二百石）、文寶堂（龜屋久右衛門、飯田町の藥種屋、二代蜀山人）、

護園（荻生維則、徂徠の孫鳳鳴の養子）、乾齋（中井豐民、太田錦城門）、琴嶺（宗伯）、以上十二人を正會員とし、馬琴の紹介による青李庵（角鹿氏、京師の人）と松羅館の親族なる梟樹（西原氏、柳河の人）を客員とした。神田に移つた一二年は、馬琴も以上のごとき閑雅なる時を持つたが、その間も絶えず心にかかるのは長男宗伯の健康であつた。これより先、馬琴は松前老侯松平美作守道廣（寛政四年冬、志摩守章廣に家を譲り、隱居して松翁と號す）の知遇を得てゐたが、その縁によつて宗伯は文政三年の秋、月俸三口をもつて松前松平家の出入醫者となり、更に文政五年四月には出入醫者の筆頭（近習格）となつたが、文政六年の春正月に發病して、その後健康が思はしくないので、馬琴は神田に移つて以來、著述の暇を見ては宗伯を連れて近郊を散策して保養にとめたので、かれこれ兩三年にして宗伯の健康も七八分通り恢復した。そこで文政十年、宗伯三十歳の春三月、世話する者があつて紀州家の家老三浦監物の醫師土岐村元立の女、路（二十三歳）を娶つた。ところが今度は同年の夏六月十七日、馬琴が霍亂を患ひ、しかも思ひのほかの大病だつたので、三女くはの夫渥美覺重なども日々來り見舞つた。八月に至つて病もやうやく愈り、このとき馬琴は笠翁を改め篁民と稱した。松前老侯松翁の翁を憚つたのであるといふ。

翌文政十一年二月二十二日には、嫡孫太郎を得てほつとする間もなく、同年夏四五月ごろから宗伯の病氣が再發し、翌十二年の夏ごろにはどうにか起上れるやうになつたけれども、爾來寒暑に耐へず、水瀉、齒牙疼痛、脚氣、咳嗽に惱まざれて廢人同様にな

り、止むなく家業も廢し、松前侯へ伺候することも稀になつた。その間、馬琴の辛勞は一方でなく、醫療の効めがないままに、人のすすめに従つて、高輪の岩尾婆々の咒法の加持、新吉原の甲斐屋の灸治、千住の齒神、鐵砲洲淺町の湊屋金次郎の筑波山異人傳法の灸、麻布相模殿橋の卜筮、醫師平野章二の傳法の湯藥、三田荒坂不動婆々の加持、その他手當り次第に療治に手を盡してゐる（瀧澤家訪問往來人名簿）。これより先文政九年正月、神明下の宅地の地主は、前の地主橋本氏が財政困難のために切坪の相對替を願つた結果、御勘定御普請役杉浦清太郎となつたのであるが、その杉浦の繼母が腹黒い人で常に義理に違ふことが多く、ことに文政十二年の秋のころに堪へがたいことがあつたので、馬琴一家は轉宅を決意し、根岸の御神器方御用達林清三郎の地面のうち二百坪を借地し、十月上旬には大工に作料の内金十兩を渡して手斧始めをさせようとしてゐる折から、仲に入つて馬琴をなだめる人があつたので、馬琴もかれこれ物入りを考へて意を講へし、根岸の借地を返し、大工にも譯をはなして金子を取返した。さうかうしてゐるうちに、文政十三年三月十八日には長女つぎが生れ、天保四年八月十七日には次女さちが生れた。馬琴も「後の爲の記」に「父は年來多病なるに、一男二女を生せしは一奇といふべし」といつてゐる。この間、天保二年四月、馬琴は伊勢松坂の殿村篠齋から五年以前の文政十年中より借覽中の「水滸後傳」を返却するにあたり、謝禮の心で水滸後傳評「半閑窓談」を同月七日に起稿し、同月十九日に一應脱稿、それより二十三日まで校訂して、二十六日、返却分の「水滸後傳」十冊、同書國字評（半閑窓談）一

冊、八大傳錦繪三枚を一包み、ほかに貸與の「拍案驚奇」を一包みに荷造りして發送してゐる（琴日記）。今回、文學部講師鶴月洋君と同助手神保五彌君をわづらはして早稻田大學附屬圖書館蔵の自筆稿本「半閑窓談」を讀刻したのは、これが未讀刻であることはもとよりであるが、何よりも馬琴の支那小説に對する見解、ひいては馬琴の讀本作法を知るに最重要の資料なるが故である。よつてここにいささかの解説をこころみることにしたい。

自序によれば、さきに享和二年の關西旅行のさい、名古屋で「水滸後傳」を一見し、京阪でこれを求めようとしたが果さず、二十餘年を経過した。ところが文政十年の春、伊勢松坂の友人殿村篠齋が、大阪で「水滸後傳」を入手したが、汚損がはなはだしいので、京都の儒者山脇氏所蔵の善本を借りて補寫し、毎丁毎に裏打ちして全本となし、これを馬琴に貸與したのであつた。ところが文政十二年に「水滸後傳」が舶來し、天保元年正月中旬、江戸でも芝の書肆尙古堂にこの書のあることを聞き、さつそく求めようとしたが、すでに賣切れてゐたので、大阪に注文して七月中旬に入手した。ところがその書は清の乾隆三十五年に蔡吳といふ者が再評讀刻した誤寫誤刻の多い惡書だつたので、幸ひ篠齋から借りてゐた原本によつて校訂することになった。しかし著述に暇なきままに延引してゐたが、天保二年の三月下旬より、しばらく著述の筆をとどめ、夜を日について校訂し、四月六日に校了したので三年越しに返却するにあたり、謝禮として執筆したのがこの書「半閑窓談」である。なほ馬琴は四月二十六日に發送した後、六月十一日に、水滸後傳追考四丁を篠齋に送つてゐる。

*殿村篠齋は伊勢松坂の酒醸家で、本居宣長門の歌人、佐五平、佐六といひ、篠の舎とも號した。馬琴四親友の一人、「八大傳」の評判記「犬搖戲筆」の著者。安永八年生、弘化四年七月三日歿、年六十九。

ところで馬琴が篠齋に送つた「半閑窓談」は、自筆稿本であつた。天保二年四月、篠齋あての書翰に、あてにしてゐた筆工二人に障ることあつて淨書ができないから、稿本のままお目にかけろが、寫本でもなさつたあとは返して下さい、と申し送つてゐる。そこで篠齋は寫本して、稿本を馬琴に返送したのは同年九月十二日のことであつた。現存早大圖書館藏自筆稿本は、同じく伊勢松坂百足町の人、桂窓小津與右衛門の家に傳はるものであるが、それは桂窓が、直接馬琴に乞うて得たものである。馬琴に乞うて稿本を購入した桂窓は、その代りとして儲書に一本を寫させて馬琴に送つた。馬琴はその寫本（早大圖書館藏）に跋して曰く「此書吾自筆の原本は曩に伊勢松坂なる友人小津桂窓に乞れて贈り遣しぬ、其代として桂子今年儲書に課せて壹本を寫させておこしける者是也、この書工文盲にて明に臨寫したれば魯魚亥帝の誤寫毛舉に違あらず、余れども今は老眼不明にして校訂に由なし、この故に強て愚姐に讀せて其違へるを正すものから、尙聞漏して及はさるも多かりてん、具眼の者見るにあらば又宜しく是を訂正すべし。天保十四年癸卯十二月廿五日、七十七翁著作堂重識」とあるので、傳來の筋道が知られる。なほまた馬琴は、「半閑窓談」を送つた翌々天保四年四月に、同じく篠齋から借覽中の「續西遊記」二十卷を讀了して返却するに當り、「水滸後傳」の場合と同

様、返禮に「續西遊記國字評」一冊を書き送つてゐる。

さて宗伯の病體にもかかはらず、次々に子供の出來た事がいささかのよすがとなつたが、不幸は次々に襲ひ、天保五年二月十七日には右眼の明を失つた。諸書に、この右眼失明を天保四年の秋八九月頃とあるが、「馬琴日記」天保五年二月十七日の條に「予今朝より右の眼中不例、少々痛有之、右眼一向に見えず候間、宗伯に様體申聞自今日洗藥用之、今日四時如例一同就枕」とあるのが正しい。しかも引續いて左眼も次第に弱つていつたことは、同じく日記、同年三月十二日の「予夜中燈下細書候故左の眼も少しいたみ且しばつき候、依之以後夜分は著述休筆保養すべし」とある記事、並びに同年五月十四日の「予眼病今日は尤不出來にて左眼もかすみ候故不便也。依之八大傳九輯の内僅に半丁稿之」とある記事によつて知られる。作家にとつては、とにかく手痛い失明に襲はれつつある折から、同年夏六月、宗伯が再び發病し、殊に脚氣がひどく、その後一時病は愈つたけれども、歩行困難となり、屏居して天保六年を迎へたが、同年四月十六日に再發した病を最後に、翌五月八日に三十八歳を一期として歿した。十日深光寺に葬り、法名は玉照堂君譽風光琴嶺居士といふ。

明けて天保七年、頼みにしてゐた宗伯はなくなり、また右眼につづいて左眼もかすんで創作力は減退し、しかも馬琴一人で老妻、嫁、孫三人の生活を支へねばならなくなつたので、一家の將來、ことに嫡孫太郎の行末を思ひ、着々とその準備をはじめた。秋になつて、多年衣食を軽くして貯へた和漢の藏書藏幅を賣り拂つて金を拵へたが、まだ足りないので、すすめられるままに、恰も齡

七十にあたるので、その賀筵を名とし、柳橋の萬八樓で八月十四日に書畫會を催した。日記に自ら「終日の來會者凡六百人許也」と書いてゐるやうに、まことに盛會で、儒者、畫家、書家、作家、狂歌師、歴々家、版元等を網羅してゐる。當然會の寄り金は莫大なものであつたが、配り物やその他の入費を差引いて二百金を残すのみであつた。一體馬琴の性質としては、みすみす利を目當てにしてこの種の會を好む筈はなく、萩侯の奥家老林宇太郎宛の書翰中、左の如く述懐してゐる。

そもそも書畫會などいふ事は畢竟利の爲にすなる者に候へば風流に似たる大俗事に候へば志あらむ者は爪はちきをにかけてかてもすべきわざには候はぬ故にやつかれは始より算賀會なんどをせんとは思はず候ひしに人々に勧められ止事をえず、此催を世話人等にうちまかせ候へ共近所にも平生交らぬ高名家の門に參り出席を希ひ候杯申は身を斬らるゝより厭はしく恥しく存候へ共世話人等が親切にて申すゝめ候へば何も世渡りと觀念致ゆかて叶はぬ所へ兩三日出あるき候ひしに云々

先に藏書藏幅を賣代なした金と、今又書畫會によつて得た金によつて、馬琴はかねて話のあつた四谷信濃坂なる鐵砲組同心の株つきの古屋敷を百五十金にて買ひ求め、十月二十八日に公よりの沙汰があり、同年十一月十日に移り住んだ。

信濃坂時代

信濃坂時代は、晩年とはいひながら、飯田町の聲や老妻百など次々に近親者に先立たれ、かつ天保十一年には全く失明しつゝも

路女に代筆させて、前後二十八年、半生をかけた「里見八犬傳」を完成した。作家として又人間として、最後の輝きを示した時代である。なほその他に、最後の長篇草雙紙「女郎花五色石臺」(初篇弘化四年刊、四篇にて中絶、以下柳下亭種員と柳水亭種清續稿)も執筆してゐる。

天保七年十月二十八日に買ひ求めた、御家人株の明跡を正式に受授して太郎が勤めることになつたが、しかしまだ何分九歳の幼年のことなので、馬琴は路女の親類の三男を宗伯の假養子として瀧澤二郎と改名させ、太郎が十六歳になるまで代動させることにした。翌天保八年七月八日には、飯田町の聲清右衛門興利が五十一歳で歿した。この後さきは再婚し、清右衛門正次を迎へてゐるが、いつ頃のことであるか明かでない。とにかく馬琴生前の計らひであることだけは推察される。

明くれば天保九年、日記によれば、この頃馬琴一家はとかく圓満を缺いてゐた。同年四月二十日の日記に「この節お百事に付娘ども苦勞いたしかれ是心配皆是我不徳の故にて時の不祥かくの如し」といひ、また同じく閏四月十日の日記には「夜に入お百子に對して怨言をのべ捨身すべしなど云、予徐にこれを諭して七年以來吾家治らざるは畢竟吾不徳の致す處」と言つてゐるが、不和の原因は、馬琴著作の助手として近侍する路女に對する百の、年甲斐もない嫉妬にあつたらしい。かういふ家庭の暗さから來たいだちのせいであらうか、翌天保十年二月、篇永春水編の「稗史外題鑑」を木村默老と共に批評した「増補稗史外題鑑批評」において、自作に對する春水の無知識、ならびに彼の舊作を無斷で新版

めかして出版する版元に對する憤りをぶちまけてゐる。著作權法のなかつた時代とはいへ、老齡かつ盲目にひとしい状態で、今の中間小説にあたる草雙紙合巻の著述も思ふにまかせず、もつぱら畢生の大作「里見八犬傳」の完成に心血をそそいでゐたきちようめんな馬琴にとつて、これは當然の憤りといふべきである。しかもさういふ一途ならだたしい生活のなかにあつて、馬琴の眼はますます惡化し、天保十一年の秋から冬にかけて全く失明してしまつた。同年九月十八日の日記に「八犬傳九輯四十四の巻稿本今日よりは是を初め六行五丁是を稿す、此節實に見えかね只手かげんのみにて是を書く」と言つてゐるが、翌十二年正月六日の日記では「八犬傳九輯四十六の巻 お路に口授致字を教て下書をなさしむ」と言つてゐるやうに、もはや手さぐりでも書けなくなつてしまつたのである。さうなつて見ると、二郎に代動させておくわけにいかず、十一年正月十八日の日記に「夜に入候に付、太郎を番代に願ひ勤さすべき旨委曲申示し云々」とあるやうに、未だ十三歳の太郎をして強ひて二郎に代らしめ、その扶持（三人扶持）によつて家計を助けようと決心し、間もなく希望通り、太郎が出仕することになつた。さうした苦しい生活を續けてゐるうち、同年秋には妹秀がなくなり、翌十二年二月七日には老妻百が七十八歳でなくなつた。

内憂外患ともども至るとは、まさにこの頃のことである。同じく天保十一年十一月には谷文晁が、翌天保十二年正月には屋代弘賢が、同年十二月には渡邊華山が、といふ風に年來の親友たちが古い櫛の齒の缺け落ちるやうに世を去つて行き、馬琴の身邊はと

みに寂寥を加へていつた。しかも翌天保十三年六月には、腐り切つた封建政體を建てなほすべく、老中水野越前守が寛政政治にならつて斷行した風紀肅正令により、馬琴としては好意の持てない相手であつたとはいへ、同じ文壇仲間の柳亭種彦と爲永春水がそれぞれ處罰され、しかもその結果種彦は天保十三年七月に、春水は翌十四年十二月に歿してゐるのである。もとより封建イデオロギイの荷擔者であつた馬琴は、難をのがれたのであつたが、戯作をもつて生きることの困難さを痛感せざるを得なかつた。

予寛政三年より戲墨を以て渡世に做す事こゝに五十三年也。然れ共御咎を蒙りし事なく、絶板せられし物なきは大幸といふべし。然るに今茲より新板の草紙類御改正、前條の如く嚴重に被出候上は、恐れ慚で戲墨の筆を絶て餘命を送る外なし。さらでも四ヶ年以前より老眼衰耄して、執筆によしなくなりしかば、一昨午子の多（天保十一年）より、愚拙に代筆させて僅に事を便ずるのみ。然れば此絶筆は吾最も願なれども、是より且暮足らざるを憂とする者は家内婦女子の常懷也。（著作堂雜記）

身の上の大幸を祝しつつも、絶筆しては家族を扶養しがたい現狀をなげいてゐるのである。内外ともに、かくの如く暗澹たる情勢のなかにあつて、天保十二年九月十六日、八犬傳の版元丁子屋平兵衛が、龜井戸の歌川國貞を連れて來て、馬琴の肖像を描かせこれを八犬傳九輯五十三巻下に掲載した。これについて馬琴が、「この擧は我本意にあらざ、丁平が罵めによれり」（著作堂雜記）といつてゐるところから見ても、當時すでに七十五歳、肉親や親友に先立たれ、命救の盡きる日の遠からざるを知つた上の振舞ひ

であらう。

天保十四年の春を迎へると、將軍家の日光社参について、太郎も供の列に加はることになつたので喜びに耐へず、前年の冬、新しい十匁筒の購入を馬琴にせがんだので、止むなく馬琴はかねて秘藏の「兎園小説」二十巻を、折よく來訪した伊勢松坂の友人小津桂窓に五兩で賣つて鐵砲を買ひ調へてやつた。賣拂つたものの翠嶺の書臺も入つてゐた「兎園小説」が心にかかり、何とか苦面をして買ひ戻さうと苦心しつつ果さなかつたことは「著作堂雜記」に記されてゐる。

かなり悲慘な晩年ではあつたが、最後まで屈せず意志を立てつらぬいて、嘉永元年十一月六日、夏の頃から病んで四谷信濃坂の家に歿した。享年八十二。法號は著作堂隱譽義笠居士。小石川茗荷谷深光寺に葬る。送葬の日、賀會の時と同じく、参列者數千を算したといふ。

なほ嫡孫太郎興邦は、馬琴のなくなつた時病床にあり、翌嘉永二年十月九日、二十二歳で歿し、母路女は安政五年八月十七日に歿してゐる。興邦の後は季女さちが繼いだ。